

<研究ノート>

つくば市の観光資源調査Ⅲ

岩田 隆一*

A Survey on Historical, Cultural and Natural Resources in the City of Tsukuba Ⅲ

IWATA Ryuichi *

Abstract

Though there are a number of books written on the history of this region, Tsukuba City and historical sites including temples and shrines for visitors to Tsukuba are described in too much detail. Eventually expected tourists might be discouraged to come and see the sites. On the other hand, many booklets of tourist information give visitors only a simple explanation.

No matter how many unattractive leaflets and booklets are printed, they will never increase the number of visitors to the city.

In this report, we have tried to present a new way of explaining some places of tourist interest in Tsukuba City. The explanation has been written with simple sentences without ignoring the historical facts, and popular topics are added so that more people can get interested in the sites.

1. 本稿の目的

本学の三年生の必須科目である発展科目の著者担当科目「旅行ビジネスの業務」でのつくば市の観光資源調査は今年度3年目に入る。2007年4月から2008年3月まではつくば市内の寺社、公園、文化施設、レジャー施設、研究施設 筑波山そして筑波山周辺地域に分類して、観光資源となりうる遺跡、場所、施設などをリストアップし、それぞれ住所、電話番号、最寄りのバス停、ホームページの有無、トイレの有無など基本情報を1

ページごとにまとめた。まとめた個所は約100カ所である。作成したデータは英語、韓国語と中国語の3カ国語にまとめる予定であるが、まだ完成には至っていない。現在も翻訳作業は進行中である。2年目の2008年4月から2009年3月は筑波山南麓の歴史遺産・史跡をまとめ、観光案内地図を作製した。

2年間の授業で学生が調べ、リストアップした史跡等のすべてを観光資源とするには史跡としての価値や知名度そして旅行者の訪問後の満足度などを勘案すると、現在さまざまな媒体を通して紹介されている「観光資源」

* 情報コミュニケーション学部国際交流学科、Tsukuba Gakuin University

が本当に「観光資源」なのかを考察してみる必要があると思われる。たとえばつくば市内には熊野神社や鹿島神社があり、それぞれ歴史的価値があるとされている。しかし歴史を知らない訪問者にとってそれはどこにでもある神社の一つに過ぎない。どんなに歴史的意味があるとしても歴史案内書のように細かい歴史を説明されたとしても、それだけで訪問者を導くことは極めて難しいのではないかと思われる。逆に観光資源を簡単に大雑把な説明しかしていない案内書（パンフレットなどを含む）もある。むしろ簡単な説明文しか掲載していないものの方が量的には多いと思われる。

本稿ではある程度の日本史の理解があれば、つくば市の観光資源を誰でも理解できる説明文を提案している。そのため歴史的な価値の説明より、つくば市を良く知らない訪問者が行ってみたいと思われるような説明文を作成することに重点を置いた。そのために史実に忠実であるが、詳細な説明は省き、分かりやすい説明文にした。

本稿では下記のような項目の新しい説明文を試みた。

1. 筑波山南麓地区
2. つくば地方の概略歴史
3. つくば新市街
4. その他の観光資源
5. まとめ

2. 筑波山南麓地区

筑波山は日本百名山の一つで標高877メートル。男体山（871メートル）、女体山（877メートル）の二峰を持つ。「西の富士、東の筑波」と称され、「万葉集」や「小倉百人一首」などにも歌われている。筑波山は、関東地方に人々が住むようになった頃から、山岳信仰の対象として仰がれてきた。山頂へはケーブルカーやゴンドラ（それぞれ所要時間約8

分）を使って行くことも出来る。

筑波山の標高250メートルにある筑波山神社は「寺」として建立された。歴代の徳川将軍家により保護された壮大な「寺」であったが、明治元年の廃仏毀釈により、本堂等は破壊されてしまい、本堂跡には現在の「筑波山神社」が造られた。「筑波山寺」の名残は神社にはない大きな山門が残っていることから理解できる。

また日本の道100選に選ばれている「筑波道」は江戸時代の三代家光の時代に筑波山寺建立のために作られた。完成後は筑波道は麓の北条の街から筑波山寺までの約4kmの参詣道として善男善女で賑わったといわれている。

筑波山南麓は豊かな筑波山の湧水で奈良時代には既に米栽培が行われていた。奈良時代の古代米と言われる米は、現在の緑色の稲穂ではなく、全体が紫色に近い濃い茶色で見た目には病虫害にかかった稲に見える。平沢官衛跡地の前では現在も古代米が栽培されている。平沢官衛は奈良時代からの常陸国筑波郡役所兼保稅庫跡地で正倉作りの建物が3棟復元されている。また当時の建物の礎石も多数発掘され、歴史公園として一般に公開されている。礎石跡から判断すると複数の建物からなっていた相当大規模な役所跡である。

筑波道の途中には古刹の普門寺がある。普門寺が歴史に登場するのは江戸時代末期の天狗党の乱である。天狗党は普門寺を宿舎兼要塞として占拠している。天狗党の来歴は普門寺の正門の前の石碑に記されている。天狗党の乱とは水戸藩出身の徳川慶喜の攘夷工作の故意のサボタージュに怒った尊王派水戸藩士46人が1864年3月26日筑波山で挙兵し、最盛期には1,400人に上る反幕府運動の反乱をさす。この天狗党に対して幕府は8月10日13,000人の討伐軍を送り、1864年9月9日に那珂湊で戦いが始まり、天狗党は多数の犠牲者をだし、捕まったり投降した兵士の多くは

切腹を強要されるか処刑された。生き延びた天狗党士は福井県敦賀まで逃げ延びたが、水戸藩主徳川慶喜が討伐軍の大將であること知って、嘆願書を出したが受け取りを拒否された。加賀藩は天狗党に同情的であった。天狗党は加賀藩に投降し、加賀藩は幕府に寛大な処置を願った。しかし幕府の命令は全員処刑であった。

1865年3月1日に幹部24人が斬首されたのをかわきりに3月20日までに352名が処刑（斬首）された。斬首された武士の家族の一部も殺されている。天狗党の乱は水戸藩士同士の争いであり、一方は徳川慶喜を頭に幕府の水戸藩士を主力とした討伐軍であり、相手も水戸藩と言う「内戦」的な面をもっていた。反乱軍352名を処刑した人たちは桜田門の変で水戸藩士に井伊直弼を殺害された彦根藩藩士だと言われている。処刑方法は斬首で、切り落とされた首は水戸まで運ばれ、さらし首にされたといわれている。

名門水戸藩も江戸末期から明治の始まりの時期に慶喜・幕府派（開国派）と攘夷派に分裂し、藩士同士で殺し合いに発展して、主だった重鎮や有能な武士が死亡してしまったので、明治維新では雄藩でありながら、際立った人材を輩出し得なかったと言われている。

普門寺は北条の町の北側にある神郡の集落の中心地に位置している。神郡は煉瓦屋根の江戸時代のようなたたずまいの家並みが残っているところがある。普門寺の郊外にはいくつかの社寺がある。神郡集落の東側にある小山の上には蚕を祭った神社で、関東一円を傘下に納めたという蚕影神社（蚕影山神社と呼んでいる書籍もある）がある。養蚕の神様として関東一円から参拝者が訪れていた。本殿には奉納された大きな絵馬が壁面上部に飾られているが、現在は神社自体はかなり荒れ果てている。祭事以外では訪れる人もいないようで、訪問者用トイレなどは壊れていて使用

不能の状態であり、休憩施設も汚れきっていて、使用することは出来ない。また蚕影神社の北約2キロ先には森の中に六所皇大神宮跡が残っている。現在はある宗教法人の所有となっているが、ここも祭事以外に訪れる人はいない様子である。神郡周辺には蔵王神社や飯名神社などがあるが、いずれも人影はほとんど見られない静かなたたずまいを漂わせている。

神郡周辺は筑波山の湧水のおかげで豊かな水田風景が広がっている。この水田風景は奈良時代からあったようである。神郡集落の東側には十三塚と呼ばれる奈良時代に作られた堤状遺溝が約100メートルにわたって南北に残っている。

北条の南東に位置する小田地区には鎌倉時代にこの地を支配した小田氏の居城跡が残っている。源頼朝の御家人の一人の八田知氏は鎌倉幕府成立後常陸国の守護職の地位を獲得し小田城を築いた。八田知家は小田氏の祖となった。それまでの常陸国南部は平将門を滅ぼした常陸平氏が支配していたが、小田氏はその後常陸平氏を従えながら常南地方最大の勢力になっていった。鎌倉幕府の政権が北条氏に移ると、常陸南部地方の小田氏の領地も北条氏に多くを奪われるのと同時に、小田氏は守護職の座も失うことになった。

守護職を解かれた小田氏は上杉謙信の軍団に加わった。しかし北条氏が勢力を拡大し下総国を統合して、常陸国へ進出した頃、小田氏は後北条氏と同盟を結んだ。そのため上杉謙信は小田城を攻撃し小田氏は敗走した。上杉軍が帰った後、小田氏は小田城を奪還したのだが、上杉謙信側についていた佐竹氏や多賀谷氏に再度攻撃され、小田氏は小田城を失うことになった。

小田城は、交通の便の良さと豊富な水資源に恵まれた場所に位置している。城が築かれた当時は本丸跡を中心として、四方に濠と土塁を張り廻らせた単郭式の館であった。戦国

時代になると城の領域を拡張しながら約40ヘクタールに及んだ平城と云われているが現在残っているのは本丸跡地だけである。これらの堀跡は現在残っていない。(下の写真は本丸跡)。

小田城は1935年6月7日に城跡周辺約21.5ヘクタールが国指定史跡に指定されて1997年に発掘が始まり、現在小田城公園として整備工事が進行中である。小田城は戦国時代の終わりごろに破棄された。小田城は南北朝時代に北畠親房が神皇正統記を著した場所でもある。しかし小田地区には中城、鍛冶屋敷、館下などの城下町らしい名前が残っている。また城跡の西側の住宅地区は長い白壁の民家が並んでおり、今でも城下町らしさを漂わせている。

小田には1987年(昭和62年)に廃止された筑波鉄道の小田駅のプラットフォームがほぼ昔の状態に残されている。筑波鉄道は土浦と岩瀬間の40キロを走っていた私鉄で、昭和30年代には、週末に旧国鉄が東京から土浦経由で筑波山への観光客を輸送していたといわれている。しかし車社会の発展とともに年々乗客数は減少し、1987年3月に運行を停止した。現在筑波鉄道線跡はサイクリング・ロードとして整備されている。地図などでは「りんりんロード」と表記されている。沿道は桜の名所でもある。春や秋にりんりんロードから見る筑波山と周辺の田園風景は筑波が最も美しく映えるときである。



つくば道の始点である北条は筑波山南麓の中心的な町で、物流の要所として古くから栄えていた。現在の北条の中心街は地方都市の商店街にありがちなシャッター通りになっており、昔の繁栄の面影を見ることは出来ないが、店蔵が3箇所残っている。大塚屋は米穀商として、田村家は呉服商として、宮本家は醤油醸造で財をなした。それらの店の蔵が保存されている。

3. つくば市の歴史

1963年(昭和38年)東京への一極人口集中を解決するため、大学や都内の研究機関を郊外の新都市に移すための「研究学園」を茨城県南部筑波地方に建設することが閣議決定された。1966年(昭和41年)筑波研究学園都市の用地買収が開始され、1970年(昭和45年)に「筑波研究学園都市建設法」が国会で成立し、新都市を筑波町、大穂町、豊里町、谷田部町、桜村、荃崎村に建設することが決定した。

1985年(昭和60年)筑波研究学園都市で科学万博が開催され、1987年11月30日(昭和62年)大穂町、豊里町、谷田部町、桜村が合併して「つくば市」が誕生した。1988年に筑波町が編入し、後に荃崎町が編入合併した。現在のつくば市は水戸市に次ぐ県下2位の人口203,000人(2010年4月現在/つくば市役所HP)の都市に成長した。

つくば市のホームページによれば「つくば市の地勢は筑波山を除けば標高20-30メートルの関東ローム層に覆われた平坦な地形で、その中を南北に桜川、小貝川、矢田川、西矢田川が流れていて、美しい田園風景を醸し出している」と述べている。

縄文・弥生時代

つくば市内には、縄文・弥生時代の遺跡がいくつかある。縄文時代にはつくば市内辺りは浅い海であったため、田倉貝塚などの貝塚

も残っている。古墳なども残っており約200基ほどの古墳が確認されており、八幡塚古墳は県指定遺跡となっている。

奈良時代

大化の改新（645年）により、高、久自、仲、新治、筑波、茨城の6国が常陸国として統合され、筑波郡となりました。市内の平沢地区にはこの筑波郡の役所と指定される遺跡があり、国の史跡に指定されている。史跡には税として集められた農産物などを保管する高床式校倉作りの倉庫が2棟再現されている。

戦国時代

この地域に勢力を張ったのは小田氏である。南北朝時代に南朝方の関東における拠点として名高い。今も小田氏の居城であった小田城跡が残っている。本丸部分にはわずかに小山と塚が残っているのだけだが、堀跡はかなり広範囲に及び、小田氏の勢力の大きさを物語っている。室町時代には関東は戦乱が続き小田原北条氏と同盟を組んだ小田氏は常陸北部を根拠地としていた佐竹氏に攻められ、敗北し城を明け渡した。

江戸時代

関ヶ原の戦い後、茨城県は水戸を中心に徳川御三家の支配するところになり目まぐるしく領主が交代した。筑波地方の有力領主佐竹氏が秋田へ国替えされたあと明治維新まで現在のつくば市内のなかで独立した藩として存続したのは谷田部藩だけである。谷田部地区には当時の松並木が「不動松並木」として残っている。

元禄時代には筑波には152村あり、それらの村々は筑波郡、新治郡、河内郡の3郡に属していた。筑波郡は土浦藩、谷田部藩、仙台藩領、幕府領、旗本領そして筑波寺領などどれも1万石以下の小さな領地に分割されてい

た。河内郡は矢田部藩、牛久藩と旗本領に、新治郡は土浦藩と旗本領として支配された。

元禄時代に大規模な領地替えが行われ、桜川流域の水田地帯は土浦藩領となり、台地地域は旗本領として複数の旗本が支配した。その後明治維新まで170年間領主の大きな変更はなかった。江戸時代から明治維新まで300年間に筑波地域はいろいろな領主によって複雑な支配の下に置かれていた。

近代-昭和時代

明治4年に廃藩置県が実施され、つくば市は新治県となり、明治8年には茨城県に統合された。そして明治22年市制・町村制が施行され、現在のつくば市域には筑波町、北条町、田井町、田水山村、小田村、管間村、作岡村、上郷村、旭村、小野川村、真瀬村、島名村、葛城村、谷田部町、大穂村、栗原村、九重村、栄村などが誕生した。

昭和28年には町村合併促進法が成立し、前記の町村は、筑波町、大穂町、豊里町、谷田部町、桜村の5町村に統合された。

昭和60年3月から9月にかけて筑波研究都市（主に茨城県つくば市御幸が丘）で、「人間・居住・環境と科学技術」をテーマに日本を含む48カ国と37の国際機関が参加し、総額6500億円を投じた「科学万博つくば85」が開催された。

科学万博は筑波研究学園都市のお披露目を兼ねていた。総入場者数は、2033万4727名で、当時の特別博覧会史上最高入場者記録を達成した。現在はメイン会場になった第一会場跡地は科学万博公園にとり、サブ会場の第二会場はつくばエキスポセンターとなっている。

科学万博のためのJR駅として荒川沖駅と藤代駅の間万博中央駅という臨時駅が設置された。臨時駅は万博終了とともに廃止されたが、1998年に臨時駅跡に新しく「ひたち野うしく駅」が開設された。

4. つくば新市街

つくば市は人工的に作られた町である。南大通り、西大通り、東大通り囲まれた新都心周辺は南北に左右対称に設計された道路を中心に街が発展している。新都心周辺は電柱の地中化がなされており、すっきりした近代的な都市景観を持っている。つくば市は未来予想図的な都市計画が立てられたが、実行されないままになった跡がつくばセンター（バスセンター）周辺には2箇所ある。一つはバスセンター交差点から北に延びる道路の東側歩道は反対側歩道より数倍広い。現在は細長く自転車駐車場になっているところは、つくばセンターからメディカル・センターまでモノレールを通す計画の名残である。

つくばセンター北側を東西に走る中央道路はバスセンター東側で道路が傾斜しトンネルに入る。不自然に作られた地下道は、現在のつくばエクスプレスが計画段階では土浦まで延びることになっていて、線路敷設予定地の名残である。

新都心の背骨のように南北に走っている道路は自動車道ではなく、北の筑波大学正門から南の赤塚公園まで延びる「つくば公園通り」である。両側には並木が整備された総延長9キロの遊歩道である。途中休憩用の場所や椅子も用意されている。筑波大学を出発したつくば公園通りは、展望台のある松見公園を通り抜け中央公園に入る。中央公園はつくば市を代表する公園で、園内には18世紀の末に筑波市内に立てられた農家を移設した「つくばさくら民家園」、茨城県立美術館、エキスポセンター、つくば市中央図書館、常設のフリー・マーケット・コーナー、アート・コーナーなどが作られている。

中央公園は陸橋でつくばセンターと結ばれている。そのまま南に進むと二の宮公園に達し、更に進めばプールやテニスコートなどを備えた大型公園洞峰公園の中に入る。さらに

進むと終点の赤塚公園に到着する。つくば市の主要な4つの公園を結んでいるので公園通りと呼ばれているのであろう。つくば市内にはその他の公園として、科学万博記念公園と蒸気機関車D51が展示されている桜運動公園が上げられる。科学万博記念公園は国際科学技術博覧会（通称つくば科学万博85）のメイン会場跡地に作られた記念公園である。

5. その他の観光資源

つくばコンベンションビューローが編集した案内書『筑波南道』（全32ページ）には42箇所の研究機関が紹介されている。一般に公開されているものとして、筑波宇宙センター、地質標本館、地図と測量の科学館、つくばエキスポセンター、サイエンス・スクエアつくば、つくばリサーチギャラリー、農業生物資源ジーンパークが上げられている。

国立科学博物館筑波実験植物園は日本と世界の4000種類以上の花々や樹木を保存している。様々な植物の形態や生態の多様性を体験的に学習できる展示植栽を行っていて、自然の景観と植物多様性がマッチした園内には、日本や世界の熱帯や乾燥地、熱帯降雨林などを代表する植物の施設もあり、また、日本を中心にアジア各地の植物コレクションと植物全般に関する学習や研究のためのよい場所である。

茨城県つくば市美術館は水戸にある茨城県近代美術館の分館として、本格的な展覧会を開催できる美術館として活動を行っている。コンピューター制御の展示室では各種展示会を開催。ビデオライブラリーやコンピューターグラフィックコーナーもあり、ショップでの買い物も可能である。

つくば市中央図書館はつくば文化会館アルス内にあり、館内には46万冊の図書、205種類の雑誌、11,000点のAV資料がある。谷田部、筑波、小野川、荃崎の各公民館図書館と

オンラインで結ばれている。

桜歴史民俗資料館は桜地区の歴史や、民俗資料を数多く展示している施設である。発掘された出土品や、民具、古文書などをよりよい状態で保存しており、ナウマン象の化石や縄文時代の料理など、貴重な資料が展示されている。

谷田部郷土資料館は歴史のある谷田部地区の郷土資料が集められている。「郷土の自然」「生活の道具」などテーマ別に展示されている。江戸時代の発明家「飯塚伊賀七」が作った木製時計の復元品も展示されている。

慶龍寺 一ノ矢八坂神社 金村別雷神社 北斗寺 泊崎大師堂 吉沼八幡神社 板橋不動尊 頭白上人五輪塔 東城寺 清滝寺 鹿島神社 熊野神社などが数種類の観光案内書に記されている。しかしこれらを訪問者が訪れる価値があるのかどうかは意見の分かれるところである。

6. まとめ

多くの機関（市役所、私鉄、観光機関NPO）が訪問者向けに多くの観光案内書（A4サイズのチラシから小冊子まで）を発行しているが、いくつかの問題が確認できた。多くの案内書が広く浅く案内するか、観光価値を無視して、詳細な案内を記している。つまり誰のための案内書なのかという視点が見えない。マーケティングの顧客が見えない。そのために目的が不明な案内書になってしまっている。問題点をまとめてみると下記のような問題点が明らかになった。

1. 誰を相手にした案内書なのかが不明

（ターゲット層が不明）

2. これらの案内書は確実に情報を希望している人々に届いているのか。

3. 紹介されている箇所は観光資源としての価値は確認されているのか。

4. これらの案内書の価値は確認されているのか。

本稿では、日帰り客のための「案内文」のサンプルを試みた。これらの文例を元に、地域別、資源別、つくば市への訪問者の訪問目的別の具体的な案内文を今後提案してゆきたい。

参考文献

- ・つくば市教育委員会「つくば市内重要遺跡（平成13年度試掘・確認調査報告）」平成14年
- ・茨城県地域史研究会編「茨城県の歴史散歩」山川出版社 2006年
- ・岩田隆一「つくば市の観光資源調査」筑波学院大学紀要4号 2008年
- ・岩田隆一「つくば市の観光資源調査Ⅱ」筑波学院大学紀要5号 2009年
- ・その他 下記の公式案内書、ガイドブック、リーフレットを参考文献とした。
 - ①つくば市市長公室広報公聴課「つくば公園通りウォーキングマップ」
 - ②首都圏新都市鉄道株式会社「筑波山マップ」
 - ③つくば市経済部観光物産課「まるごと筑波山」
 - ④つくばエクスプレス「サイクリングライン」
 - ⑤つくばコンベンションビューロー 「筑波南道」
 - ⑥つくばコンベンションビューロー 「つくばポケットマップ」
 - ⑦つくば市「筑波山ガイド紫季彩」